
クピドの贈り物

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

クピドの贈り物

【Nコード】

N7769C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

愛の女神の息子クピド。ふと出会った少女プシユケーと恋に落ちる。その彼女への贈り物は。ギリシア神話からです。ほのぼのとした花と恋のお話をどうぞ。

第一章

クピドの贈り物

アフロディーテーの息子にクピドという神がいた。黄色くふわふわとした神に涼しげな青い目を持つ綺麗な顔の少年の姿をした神であり人の恋を取り持つのがその仕事だった。

それが仕事であるがいつも他人の恋のことばかり受け持って自分のことは何もなしだった。それに自分でも気付くと急にやりきれない気持ちになったのだった。

そのことを彼の母親であり主でもあるアフロディーテーに話をしてみた。誰かに話さずにはいられずその相手が他ならぬ母でありしかも愛の女神であったからだ。至極当然の流れであった。

彼はアフロディーテーの神殿で話をしていて。その奥の女神の部屋において。

「貴方も恋がしたいのね」

アフロディーテーは波うつ黄金色の髪に琥珀の奥二重の瞳、そしてうっとりするようなまだ幼さの残る顔立ちに服の上からでもはつきりとわかるスタイルを持つ長身の美女であった。白く雪のような肌と薔薇色の唇も持っている。目は少し垂れ気味だが左の目元の泣き黒子が彼女の匂い立つような色香を際立たせていた。

「はい」

クピドはそのアフロディーテーの問いに答えた。

「僕だって心があります。だから」

「人との恋の取り持ちだけではなく自分も」

「そうです。それは駄目なんですか？」

じつと母を見詰めて問う。

「僕が恋をしたら」

「いえ」

女神はその言葉を受け止めた。そのうえでにこりと笑ってきたの

であつた。

「誰にでも恋をする資格はあります。神であれ人であれ」

「それじゃあ僕も」

「そうです。ですから」

女神は彼に述べる。優しい声で。

「貴方は一度地上に降りてみるといいです」

「地上に？」

「そうです。そこで恋を探してみなさい」

そう我が子にアドバイスをするのだった。

「その間は私が貴方のかわりに仕事をしておきますから」

「けれどそれは」

「それから先は言う必要はありませんよ」

アフロディーテはまた優しい笑みを浮かべて彼に言うのだった。

「私は愛の女神なのですから。こつしたことなら」

「そうなのですか」

「そうです。ですから安心して」

「わかりました」

母の言葉にこくりと頷いた。

「じゃあ地上にですね」

「そうです。そこで出会いがあります」

「出会いが」

クピドはその言葉に顔を上げた。何か希望の言葉を聞いたと思つた。

「わかりました。それじゃあ今から」

「お行きなさい。運命に」

にこりと笑つて述べる。そうして彼は地上に降りることになつたのであつた。恋を取り持つのが仕事であるから地上にも何度も降りていることは降りている。だが今はそれ以上に何か特別な気持ちでその地上を見ていたのである。

「さてと」

クピドの贈り物

彼は期待に震える顔でその地上の世界を見回す。そこで恋を探していたのだ。

「きつとある筈だ」

彼はそう言いながら辺りを見回す。

「出会いが」

その出会いを探して地上を歩き回る。母の言葉を信じてあちらこちらを歩き回るうちにある牧場に辿り着いたのであった。

そこで一輪の花を見つけた。それは小さな黄色い花であった。

「これは」

「ひなげしよ」

前から女の子の声があった。

「そのお花はひなげしっていつの」

「そうなんだ」

クピドはその言葉を聞いてあらためてその花を見た。

「この花が。小さな花だね」

「けれど綺麗な花でしょ」

「うん」

その声に頷く。

「何て花なのかな」

「ひなぎくっていつの」

「ひなぎく!?!」

「ええ。いい名前でしょ」

ここで女の子が出て来た。見れば紫がかつてすら見える綺麗な黒髪に白く透き通った肌、青い湖のような目に紅の唇と整った容姿の少女だった。彼の母親であるアフロディーテにも比べられる程の美しさを持った少女であった。

「えっ……」

クピドは彼女の姿を見て思わず息を飲んだ。淡い色の服も実に似合っていた。

「君は」

クピドの贈り物

「プシユケーっていうの」

にこりと笑って澄んだ声で答えてきた。

「この牧場の娘だったの」

「そうだったんだ」

クピドはそれを聞いて何故彼女がここにいるのかわかった。プシユケーはそんな彼にまた尋ねてきた。

第二章

「それで貴方の名前は？」

「クピドっていうんだ」

彼は名乗った。

「クピドっていうの？」

「うん。ええと」

まさか本当に神様と言うわけにはいかない。ここは少し嘘をつくことにした。

「羊飼いをやってるんだ」

「羊飼いな」

「うん、この羊はどれもいい羊ばかりだね」

牧場にいる羊達を見回して言った。見れば羊達はのどかに草を食べたり寝たりしている。穏やかで平和な様子であった。

「そうでしょ。お父さんもお母さんも頑張ってるから」

プシュケーはにこりと笑って答えてきた。

「だからね」

「いいことだと思うよ。それにしてもこのひなげしは」

「気に入ったのかしら」

「うん」

にこりと笑ってプシュケーに答えた。

「綺麗で可愛くて。何か見ているだけだね」

「じゃあずっと見ていましょうよ」

プシュケーはこう声をかけてきた。

「どうかしら、それで」

「うん、君がいつっていうんなら」

クピドもにこりと笑って返した。二人はそのまま牧場で毎日会ってひなげしを見ていた。クピドにとってひなげしはプシュケーと同じくいつも見てみたいものであった。

クピドは本当にプシユケーが好きになってきていた。いつも側にいたいと心から思いはじめていた。そんな彼女と話をしてひなげしを見るのがたまらなくなっていたのだった。

「満足しているようね」

「はい」

地上に降りて様子を窺いに來たアフロディーテーに答える。その顔は実に晴れ渡ったものであった。

「これが恋ですよね」

「そうよ」

アフロディーテーは彼の言葉ににこりと笑って答えた。その笑みは実に気品があると共に艶やかなものだった。美の女神というだけはあった。

「これが恋なの。見つけたみたいね」

「はい。何かずっといいたいです」

「ずっとなのね」

アフロディーテーはその言葉に微妙な顔を見せてきた。それは何か言わなければならないことを隠そうかどうか迷っている顔であった。

「はい、ずっと」

「その娘はニンフなのかしら人間なのかしら」

「人間ですけれど」

クピドはこう答えた。

「それが何か」

「そう。それでその娘を本当に好きなのよね」

「はい」

母の問いにこくりと頷いて答えた。彼は気付いてはいなかった。母の言葉の意味も自分が何かも。それを言われ打ちひしがれることもだ。

「けれど。最後までは一緒になれないわよ」

「一緒について。どういふことなのか?」

「貴方は神、そして彼女は人間ね」

「はい」

それはわかる。だがその意味はわかってはいなかった。それを言われたのだ。

「神は永遠に生きる存在。けれど人は」

「じゃあこの世ではプシユケーとはずっと一緒にはいられないんですか!？」

「ええ」

アフロディーテはクピドに対して頷いた。

「そうよ」

「そんな、僕はプシユケーとずっと一緒にいたい」

その気持ちは本当だ。変わることがない。

ずっと。それなのに」

「残念だけれどそれはできないの」

アフロディーテは悲しい顔で首を横に振った。

「交わって子供を作ることばできても」

「そんな……」

「永遠に一緒にいることはできないの。それが人間としての運命なの」

「人間のですか」

アフロディーテは今まで多くの人間と交わってきた。それにより子ももっている。しかしそれでも人間の命は限りがあることを知っていたのだ。それを知るまでに多くの悲しみも経ている。わかっているからこそそのクピドへの言葉だったのだ。

「だから。覚悟はしてね」

「僕はプシユケーと永遠にいられない」

クピドはその言葉を呟く。呟くがどうにもならない。

「けれどどうしたら」

「それでも愛することはできるわ」

アフロディーテは述べてきた。

「それもわかって」
「愛することは」

このことも教えられた。しかし受け入れるには多くの葛藤があった。暫くの間どうにもやりきれない気持ちで沈んでいた。何をすればいいのかわからなかった。

プシユケーと一緒にいる時もそれは同じだった。沈んで一緒にいても俯いてばかりだった。プシユケーが話し掛けてもそれは変わることがなかった。

「どうしたの？」

「うん」

ぼんやりとした様子でプシユケーに応える。

「ちよっとね」

「ちよっと？」

「いや、あのね」

その暗い気持ちでプシユケーに顔を向ける。

「僕とずっと一緒にいたいよね」

「ええ」

プシユケーは何も疑うことなく彼の言葉に答えた。

「そうだけれど」

「うん、僕もそれは同じ」

クピドは俯いたままプシユケーに言葉に返した。

「けれど」

「私が死ぬまでね」

だがプシユケーはここでこう言ってきた。

「どちらかがいなくなってもね。その時まで一緒にいたい」

「一緒に!？」

「そうなの。そしてそれから心の中でね。一緒に」

プシユケーの考えはこうであった。生きている限り一緒にそれからもお互いの心の中で一緒にいたいと。そう考えているのだと。それが今クピドにもわかった。

「何時までもね」

「何時までも」

その言葉を聞いて顔を少し上げた。

「そう、心は何時までも一緒よ」

また言うのだった。その時ふと太陽の光が目に入った。

太陽はアポロンのものだ。だが全てを輝かすものである。今彼はそれが目に入ったのであった。まるでそれが運命であるかのように。

「いいわよね、それで」

「う、うん」

少し戸惑いながら答える。悪息はしなかった。

「それでね」

「よかった。それじゃあ約束して」

プシユケーはにこりと笑って彼に声をかけてきた。

「いいわよね」

「うん、それでいいよ」

クピドもにこりと笑って言葉を返す。こうして二人は約束したのだった。何時までも一緒でいようと。この時クピドは言おうと決めた。こうした約束をしたのならもう隠すものがあってはならない、こう思ったのだ。

第三章

「僕も君に言うことがあるんだ」

彼は言ってきた。

「何かしら」

「実はね、僕は人間じゃないんだ」

「えっ」

「僕の名はクピドっていうんだ」

人間ではないという言葉に目を丸くさせるプシユケーにさらに言った。言いながら手を少し動かせる。まるで手振りを加えるかのよううに。

「クピドっていうと」

「うん、恋を取り持つのが仕事のね」

そうプシユケーに言う。

「神様なんだ。黙っていたけれど」

「そうだったの。まさか」

「そのまさかだったんだ。それでね」

クピドはさらに言葉を続けた。

「僕の命は長いから君とずっと一緒にはいられない。けれどさっき言ったよね」

「ええ」

プシユケーはクピドのその言葉に頷く。頷きが少し強張ったものになっていた。まるで怯えているかのように。実際に彼女は怯えていた。まるで彼の言葉を恐れているように。

「心では一緒だって」

「言ったわ。その気持ちは本当よ」

「そうだね。その気持ち確かに受け取ったよ」

それをはっきりと言った。

「だから」

ふと顔を前に戻した。そこにあの花があった。

「何時かは君の心と一緒に神様に戻らないといけない。けれどね」
花は何も語りはしない。黄色く素朴な姿でそこに咲いているだけだ。そうしてそこに素朴な姿で笑っているだけであった。少なくとも笑っているように見えた。

「これを。この花を」

「デージーを？」

「君とここでいた記憶に何時までも持っっているよ」

じつと花を見て言う。その目を花から話ほしない。

「その証拠に」

魔法を使った。それはデージーに向けられたものであった。

「春にね。これを」

「春に」

デージーが牧場全体に咲く。緑の絨毯が黄色く変わった。そのように見えたのだ。

「僕達が出会ったことはこれでずっと残るよ」

またプシュケーに告げた。

「ずっとね。何があっても」

「有り難う」

プシュケーは嬉しさで泣きそうな顔になった。その顔で礼を述べる。目が潤み熱い涙が溢れそうになる。

「じゃあこのデージーを私が死ぬまでずっとね」

「死んでからも。心の中で」

二人は言葉を交えさせる。心が重ね合う。

「見ていようね」

「ええ」

こくりと頷き合う。二人の心は完全に重なり合った。

「その為にもね。この花を」

クピドはデージーをまた見た。それに魔法をかけた、するとそれが牧場全体に拡がった。黄色い絨毯が牧場を覆ったよ

うに見えた。それはクピドからプシユケーへの贈り物であったのだ。
「デージーが」

「春になったらいつもこうなるよ」

またプシユケーに顔を戻す。そのうえで言う。

「こうしてね。それでいつも」

「春になったら思い出すのね」

「うん、僕達が出会ったこの時のことをね」

にこりと笑ってプシユケーにその中の一輪を手渡す。それが二人の絆の花となったのだった。デージーは二人の出会いの花になったのだった。

クピドの贈り物 完

2007・4・5

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7769c/>

クピドの贈り物

2009年6月23日10時34分発行